

18
あか

蜀山人作
上田萬年校訂

よもものあか

名著文庫

東京合資
會社
富山房發兌

袖珍
名著文庫

全部
百册

▲每篇紙數二百頁▼並製正價一册金廿錢●六册金壹円拾四錢●拾二册貳円廿貳錢●廿五册金四円六拾錢●五拾册金九円●全部百册金拾七円五拾錢●上製一册二付金八錢増シ●

明治卅六年十月卅一日印刷
明治卅六年十一月三日發行

校訂者

上田萬年

發行者

東京市神田區裏神保町九番地
合資會社 富山房

代表者

同所合資會社 富山房社長
坂本嘉治馬

印刷者

同市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
森潤二

印刷所

全株式會社 秀英舍第一工場

不許複製

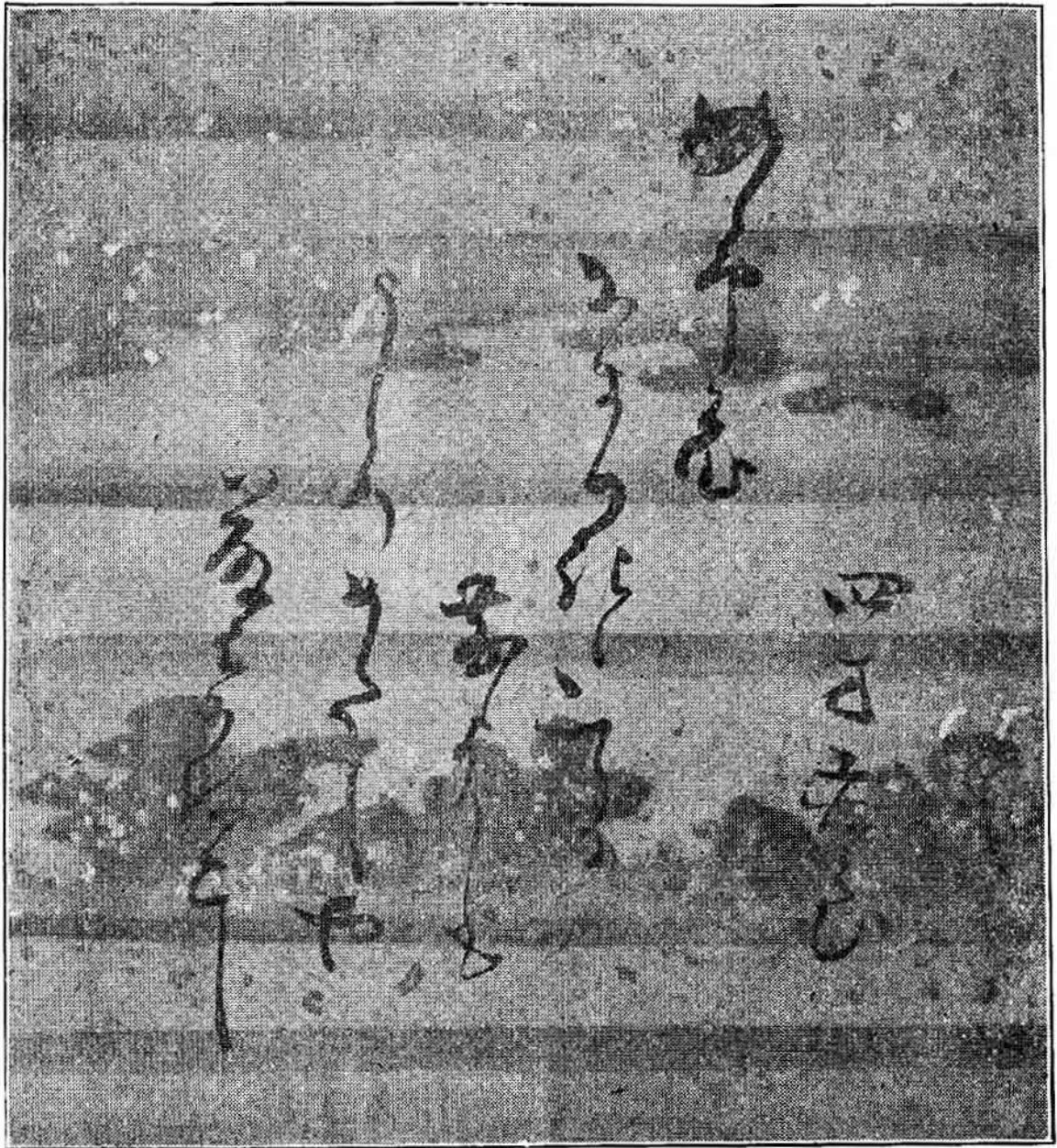
よものあか
付奥上製定價金廿八錢
並製定價金貳拾錢

西哲の言に「肉體を養ふには食を以てし、精神を養ふには書を以てす」と云へり。就中文學は慰安の源泉、理想の靈餌にして、社會個人の文明的生活に大關係を有するもの、文學なき人は花實なき草木の如く、文學無き社會は公園なき都府に似たりといはんか。明治の洪業こゝに三十六の春を重ねて、外形着々整備すと雖も、精神上の開拓惜むらくば之に伴はず、所謂佛作つて魂を入れざるの憾あり。乃ち高尚なる娛樂、健全なる文學を一般の家

庭に注入して徐に之を導かんの意、我が先達の間之急にして此の叢書を成しぬ。收むる所戯曲、小説、詩歌の純文學より史傳、紀行、隨筆、雜論に至るまで、皆慎密なる鑑査の篩を経て、一として國文學の精英ならずといふこと無し。庶幾くは社會の乾燥を醫する清爽の水たるを得んか。刻成るに臨み、校訂者に代りて聊か其の意を述べ。

明治癸卯三月

富山房編輯局



例言五則

一 本書題して四方のあかといふ。蜀山先生の狂文集なるよものあかと四方の留糟とを合せたるもの、前なるはともゑのまがほ、後なるはいとまさのめしもりが選び出たるところ。

一 先生が天明より文政かけての狂歌狂文界の泰斗たること、さてはその學識の和漢古今の雅俗にわたりて、才氣縦横頓智風牛、一代の奇傑たるとは、皆人の知るところ。茲に贅言を要せざるべし。先生は年七十五、文政六年四

月六日にみまかりたまひたる人、今よりは大凡八十年のむかし。

一 本邦の狂歌狂文には、放縱の極たま／＼卑猥の言辭を弄するもの多し、先生の奇文は、此點に於て聊か批難すべきもの少しといへども、しかれども遂に此弊を脱することあたはず、人の罪か社會の罪か、まじめにあげつらふはむしろ野暮なるべし。

一 本書を校訂するにあたり、淺學菲才のやつがれ、忽にして和漢の書典の多きにおどろき、忽にして古今の言辭の難きにゆきづまり、殊に當時の粹様がいきなみち／＼に

は、開けし御代に開けぬ人のふみだがへるも多かるべければ、おもはぬ滑稽に陥りしもさはなるべし、もとこれ譬者が大象を評せるもの、先輩の諸君子あはれみたまへをしへたまへ。

一 句讀をうち、假名、假名遣をたゞし、多く漢字をあてたるは、やつがれが自ら責に任ずる所なり。本書は多数の人の娛樂に供するを目的としたるものにして、學者のこちくしき研究のため、ただしは又通客粹士がひとりよがりのれうにとて、ものしたるものにあらざれどなり。

明治三十六年十月

校訂者しるす

四方のあかの序

このふみや、四方よもの赤あかの一本いつぽん氣きにして、かりにも水みづくさきた駄た酒しゆをまじへず、もとより巴人はじん亭ていの本店ほんてんにつみて、かつて吞口のみぐちをだにひらかざりしを、おのれひそかにこれをうれへて、こたみ琉球りうきゆうのかゝみをひらき、樽底たるそこのおくをさがし、徳利とくりのかけたるをおぎなひ、四斗しと樽たるのもれたるをあつめて、しるしの杉すぎのはん木ぎにのぼせぬ。もしきゝ酒さけの口功者くちこうしやあらば、きたりて名酒めいしゆの味あじをなめよ。暖簾のれんにしるさ扇巴あふぎどもゑ。これを居酒屋ゐざかやの門かどにかけて、一字じの損益そんえきをまつといふ。

宿屋飯盛しるす

四方よもの留粕とめかすの序

此このあかは吾酒わがあかならず、四方よもに知る赤良あからの大人うらしの釀かみし酒あじぞ。う
 まらにをせさゝさゝおせくくと流行唄はやりうたに浮うかれたりし、安永あんえいの
 むかし、はじめて滑稽こちけいの口くちをひらきて、狂きやうやく好このむたはれ人びとに
 すゝめ手醉てゝゑひあしゑひ酔ゑひくるはせ、一筋ひとすぢの路みちを十文字ともしじに踏ふみせし
 より、千鳥ちどりあしの跡あと久ひさしくとゞまり、今いまも昔むかしに仁寶鳥にほどりの、か
 つしか早稻わせのうま口くちなる、大人うらしの新釀ひひしほりもがなと、ふみのはや
 しの杉すぎをしるしに、たづね來くる人ひと日々ひに絶たえず。げに戯文章たはれもんぎやうは
 年月としづきにさまかはりて新あらたなるを、をかしと思おもふ習ならひなれば、
 何なにとかやの酒さけの十ととせをへてそこねざるも、口くちなれたるはめ

づらしからず。然りとて酒つくる才なき人のしほり出したる
 は、新しきも味ひなし。かくては何をちからとしてたはれう
 たをうたひ、戯れ文をつくるべき。瓶のつゝるは疊の恥とか。
 いざたまへよきあか乞にと、書屋とともに大人のみに参
 りて、此殿の奥の酒屋のうはだまり、あはの中酒をだにとこ
 ひもとめたりしに、留粕といふ物四十枚ばかりとう出て、か
 う僕くさきものながら、幸ひに接骨くすしの泥鑊にもかゝら
 ず、漬物店の桶にも入らずて、爰に留粕のとまりて久しきが、
 さすがに人酔はすべし所なんある。かの劉伶が寐むしろに敷、
 億良の太夫の寢酒にあたゝめけんやうに、からの大和のねご

といひ出いすたねともなるべくは、その汁しるをすゝりその糟かすをく
 らひて、ふみ商人あきびとの腹はらをこやさせよと投なげあたへ給たまへりしを、
 やがて寧樂なちの櫻木さくらぎにゑらせて、糟堵かすかきのかけず崩くづれず、幾いくひさびさ久々
 と南總館なんそうくわんのあるじとゝもに、禱いたくるほすもまづ粕かすの匂かに酔よる
 なるべし。

四方歌垣真顔



文政二年己卯正月吉日

目次

よものあか上

達摩たつまの賛さん

遊女いうぢよの賛さん

○車くるまどめ

雪見ゆきみのことば

西行法師さいぎやうほうしをとふらふことば

山手閑居やまてのかんきよのき記

遊女高尾朱いうぢよたかをしゆわんのき腕わづ記

土偶人どぐうじん畫ゑ賛さん

鯉かつ魚ぎょ賛さん

又また

兒じ戲ぎ賦ふ

庭潮石記ていこせきのみせ

猫賦ねこのふ

わらはのためちに乳ちなきをなげくことは
鼠ねむみをせむることば

なつぐさ

橘菴記きつあんのみせ

鉤匙橋記こうしはしのせき

はいめんたるまのさん
背面達摩賛

ゆきをんなのさん
雪女賛

ばぜをあんたうせいをうのさん
芭蕉菴桃青翁賛

せいらん
から誓文

たみしぜんべゑころもほうかちやうばえんを
疊師善兵衛衣の奉加帳募縁疏

おほねふときちりつるりろうのき
大根太木塵積樓記

つきみせつ
月見の説

かすがべさゑもんのじやうつかはかんじやう
春日部左衛門尉へ遣す感状

しいかけうたいたいめん
詩歌兄弟對面のつらね

おほねふときばんきやうかあはせはんししくが
大根太木十五番狂歌合判詞奥書

肖せう 柏はくの 賛さん

日ひぐらしの日記にき

冬とう日じつ逍遙亭せうえうてい詠夷歌序いはいかのじょ

竹本政大夫碑たけもとまさたいのひ

木兔引賛づくひきのさん

よものあか 下

向島賦むかよ じまの ふ

加保茶元成春帖手鑑序かほ ちやもと なり しゆんてう しゆかんのじょ

早稻田太神宮法樂の文わせ た たいじんぐうほよろく ぶん

黒づくし暫くのつらねくろ づくし しばら